

「私の戦時中から敗戦後にかけての記憶体験」

柿谷 昭 （８８歳）

私は昭和６年１１月２３日生まれの８８歳です。尼崎市杭瀬３ノ坪にあった繊維会社の社宅で生まれて幼年期を過ごし、昭和１９年３月尼崎市長州小学校卒業、同年４月尼崎工業学校を受験して入学しました。入学試験ではペーパーテストは無く、５教室を順次めぐる面接による口頭試問でした。一学期は工業学校１年生として通常の授業、国語、幾何、代数、化学、英語、歴史、体育、武道等の授業があり、土曜日は終日実習で鍛造、木工、鋳物、仕上げ等に分散して実務教習を受けました。

夏休みが終わり、２学期９月に登校すると１年生全員勤労働員を命ぜられ、私は尼崎市杭瀬にある大同製鋼の検査課に１０名ほどの同級生と共に配属されました。作業内容は製品である鋼板の検査で、材質や表面の傷の有無を調べ、幅と長さ厚さを測定する作業です。勤務は、１日８Ｈ、週６日、日曜休日、給料は月額３０円で校友会費など差し引いた２５円程は全額貯金で、貯金通帳は派遣教師が一括管理して、特別の事情がない限り引き出し不能でした。（当時義務教育修了者の初任給は月額１００円程だったと聞いています。）

昭和２０年６月中旬、動員で勤務していた職場及び居住していた住宅共に空襲で全焼、妊娠中の母と４歳の弟と共に母の郷里徳島の田舎に避難し、親戚の納

屋の2階の一部を借りて置いてあった古い機械や農具などを片隅に移動させるなどして^{むしろ} 2枚ほどのスペースを確保して、電燈も畳もない板間の部屋で避難生活を始めました。

8月、日本の敗戦で戦争は終わりましたが、避難生活を終える見通しは無く暗闇の2階暮らしは継続、せめて義務教育は終えておきたいと思った私は、田舎の小学校高等科2年に編入して通学し、妊娠中だった母は11月、暗闇の納屋の2階でローソクを頼りに女子を出産しました。（この時生まれた女の子は、現在川西市で健在。）

21年11月尼崎工場の焼け跡整理を終えた父に、大阪の貝塚工場へ転勤辞令が出て工場社宅の1軒を与えられ、私たち家族も疎開生活に終止符を打ち、12月貝塚工場社宅に転居しましたが、茶碗などの食器や寝具は会社のマークのついた工場からの借り物ばかりで、私も父と共に働き1年程掛かって自前の家具に置き換えることができて、やっと戦災という情けない嫌な過去から少し遠ざかることができた様に感じたものです。